大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）大正十三年十一月十日印刷　大正十三年十一月十五日發行

川柳雜誌

第一卷　第十號

川柳雜誌　第一卷　第十號（大正十三年十一月十五日發行）目次

個の中に倒るゝこと……田中次俊…（六）
喘鳴錄（也有の川柳味）……蛭子省二…（一四）
金を拾つた話……黑木莢豆…（一三）
川柳書架…（七）……（一八）
近作柳樽……麻生路郎選…（一一）
募集句
年增……近藤飴ン坊選…（一六）
山……安川久流美選…（一八）
妾宅……龜井花童子　吉川啞人共選…（一九）
柳翁忌……二柳子記…（八）　第八、第十支部句會……彩霞報…（十）
第十二支部句會……花童子報…（十二）　第十三支部句會……助六報…（十三）
川柳塔……（二四）
雅幽、美の作、默閣、柳路、助六、彩霞、柳骨
莢豆、かほる、葭乃女、松雨、史風、二柳子
大阪讀込みのくさき……（二十）　十五年間の不可思議……松雨…（二一）
編輯後記……（三〇）
川柳略語解……西原柳雨…（三五）

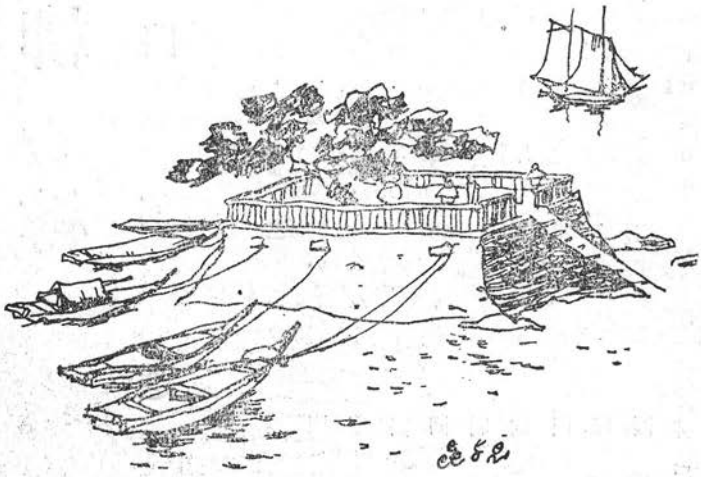
川柳雜誌

第一卷第十號

次の句を讀むとしんみりとさせられる。川柳が滑稽なものだとのみ思ふてゐる人達に一讀を乞ふ。

淋しいも秋
おごろくも
秋の空

（柳縁より）



近作柳樽

路郎選

もう少し買へばよかつた値が上り　大阪元山
さてお前の來た時分はこ親旦那　同同
石段を下りてしまつて思ひ出し　同同
あべこべに廻つて來たで見付けられ　同同
そんなこごぐらいこ言へばかしこさう　同同
落付いた所で女房乳房出し　同同
思ふ存分働いて居る仲仕なり　同同
木の葉一つ浮いて靜かな池に見ね　同同
夕立に區役所までの傘を持ち　同同
ポストから一直線に家へ入り　同同
氣に入らぬ柄は横手へのけさせる　同同
御存じの所をぬいて話をし　同同
千日へ來てから常着氣がこかめ　同同

待たされるまゝにビールが二本あき　同同
だから言はぬ事ではないこ女親　同同
五分五分の理屈に兄は叱られる　室蘭愚劣
父へ似ぬここが淋しい月足らず　同同
そうなればこつちの物こ虫のいゝ話　同同
淋しさを乘せて殘して汽車はたち　同同
働けば二斗一升の飯は喰ふ　同同
縲紲なぞごうでもこ云ふ嘘をつき　同同
長所は貶し落度へ輪をかけて　同同
これまでの緣こは心細すぎる　同同
廢兵へ下女要りませぬ丈で押し　神戸寸馬
素面ではよう言はないで女房が來　同同
レッテルが少しこ口へ出て終ひ　同同

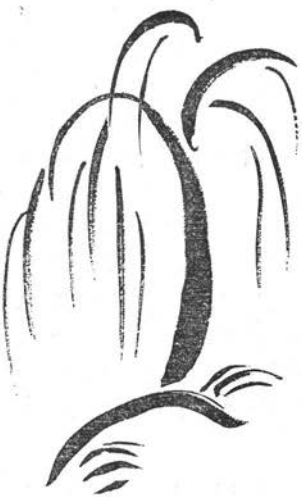
小奇麗にして　歌澤の弟子をさり　同
内閣に入つて漫畫の顔になり　同
年寄りのいふ事も聞く丈になり　同
川風に待ちぼけて居る男前　同
西風が吹いて袷を縫急ぎ　同
朝顔にあまりにむごく日があたり　同
鼻の低いこと仲人も知つて居り　和歌山　久樂
心配をさせない爲に嘘も書き　同
水溜り盲は杖を突き直し　同
朝刊を寢間着のまゝで拾ひ上げ　同
姉はもう妾の家も知つてゐる　同
土用干説明に困るものも出で　同
提灯の尻ぬかるみにちこぬらし　同
俺の影長く垣根で折れて居る　横濱　三拍子
考へて置くこいつたを忘れてる　同
死にゝ行く二人こ知らず撮つてやり　同
我一人歸れず椅子をもてあそび　同
父ちやんが居てあぶながる遊びなり　同
ステッキは叩けるものを叩きつけ　同
松之助あなたこなたに現れる　大阪　夢路
髪結の姉が早稻田へ學ばせる　同
ブラチナこ見ゐない樣な帶をしめ　同
弟は寫眞蓄音器は親父　同
振袖の時學友こ出合ふなり　同
靴磨きしてゐこ遊ぶ連れが來る　同
未だ明かいけれど殘業灯をつける　大阪　秀哉
臺所へ電車こられてハーモニカ　同
割込んだ義理に傘の柄手を添ゐる　同
運轉手まだ乘れるのに鎖かけ　同
呉服屋で手に取る迄は買ふ氣なり　同
新兵に電車で時間問はれたり　廣島　一兵
二人の一人は妹に好く似てる　同
つばを吐くやうに女裏切りし　同
好い鮎があるこ社長へ電話なり　同
慘めさは泥にまみれたみゝずにて　同
別莊の櫻に石を投げて見る　同
妾宅の生活を思ふ不甲斐なさ　同
小説のやうにもならずこの生活　大阪　松郎
來客が歸つて元の手内職　同
失職の身に母親の一週忌　同
その昔親爺に助けられた奴　同
待たされる間床屋で二度の記事　同　乾坤

叩かれた牛言ひ譯にちと急ぎ　同
許すべき事にも叱る親の慈悲　同
有體に言ふは許してもらはる氣　同
水枕居眠る母をじつと見る　同
下戸丈けが舞妓の行衛知つて居り　同　白柳子
不甲斐無い親恨む間も踊らされ　同
機關車が來るこ一足みなすさり　同
磨硝子雨がハツキリにじんでる　同
驛長が植木をなぶるいゝ日和　同
張板の方へ轉がる干した傘　同
張板の濡手子供をよせつけず　同
エブロンの女中そこいら迄の用　同
寫眞屋の智慧で子供はちと笑ひ　同　仁川　しげる
脊の子が見てゐる軒の日章旗　同
三面の記事へ二人は死んで居り　同
こんな時あつたこ寫眞帳を出し　同
又嘘を聞きに掛取り出るのなり　同
本當に惚た女給は寄つて來ず　同
抱いた子に朝顏一つちぎらして　同
病室の窓に歩ける人が見ゐ　同　神戸　俊坊
帽子靴眼鏡氣にして行く男　同

境内の土に親しむ町に住み　同　同
もう年にされて門衛葬送られる　同　同
押賣こ知つて子供が鍵をかけ　同　金澤　喜花
稻の舟人江を沈みそうにゆき　同　同
親切な心を浮氣沙汰にする　同　同
さればこて花持ちする氣にもなれず　同　同
紋付を着るこ可成な男なり　同　大阪　東城子
棚吊つた當座女房よくうごき　同　同
流連へ笑顏で通る内娘　同　同
目覺しは倒れたまんま鳴りやまず　同　同
火打箱うちにも昔ありました　同　三巴
引かされた强みを朝に晩に見せ　同　同
噂より進んだ仲が機を待ち　同　同
書いて喰ふ覺悟を父にさけすまれ　同　同
麥稈を鍛冶屋いつまで冠る氣か　同　鳶歩
年寄こなつて土俵を遠く見る　同　同
荒つぽう傳馬は沖へ漕いで行き　同　同
地玉だこ云へば地玉で買つて行き　稗島　眠聲
うぞんかこ思へば道を聞いて去に　同　同
水枕リンゴそのまま置いてあり　同　同
馳け出して行く子半分戸を閉めず　同　函館　二三吉

逃げやうとするを押ゐられてゐる心地　同　同
早退きをした日は社から用を達し　同　同
嬉しさが包みきれない十八九　岡山村夫
ジッと雁來紅を見詰めて居る娘　同　同
靜かに〳〵流れて海に入る川　同　同
女房を安心させてさて困り　大阪しげる
女化村ラケット掛けるとこがあり　同　同
釣れるかと云はれて餌を付替へる　同　同
足らぬだけ自腹切る氣が言ひすぎる　平壤是々坊
質屋から歸ると仲居すしになり　同　同
說教が濟むと耶蘇教又唄ひ　同　同
目が覺めるのを待つてゐる許嫁　神戸琴月
のびてゐる爪を女に叱られる　同　同
損の行く事冗談にして終ひ　同　同
丸髷も混ぜて女工の群が去に　堺不越
東西屋今出る店の人集り　同　同
拜啓と書いてインキをつけ直し　同　同
お茶一つ貰ふに行儀よく座り　同　夢六
來る時の話と違ふ務め先　同　同
隣だけ電氣の消ゐた騷ぎなり　同　同
アスハルト切れて口說が後戻り　豐中馬行

あの人も嫁つたさうなを聞く休暇　同　同
いつの間か生徒へ嫁つたことが知れ　同　同
朝顏の種を賴んだまゝで死に　堺一柳
唄ばかり唄ふ女でもの足らず　同　同
姑と二度目の嫁さうまがあひ　神戸嶺月
さうなるとうまいもんやと當にする　同　同
二年生絣を粘土だらけにし　大阪一路
應用化學科しやぼん屋のぼんち居る　同　同
足並をそろゐスカート通りぬけ　神戸天魂
金ためて買ふと女工の話なり　同　同
兄弟子が八千代と云ふ妓に通ふなり　大阪薫流
電話から少し聞ゐる籠の鳥　同　同
知らぬ間に割れた柘榴を子が見つけ　同　月の輪
出來た子を亭主は立つた儘覗き　同　同
新調はチット早いが着てるなり　神戸一休
ひつそりとしたこと旦那見つけて來　同　同
お日樣に負けてくしやみを二つする　西宮二葉亭
朝飯はバナナにしこく二階借　同　同
直ぐ縫ゐる事を男は面倒がり　平壤美濃守
大阪辯まあしやべるこしやべる事　山口吐露坊
醫者へ行く子にちと早いマントなり　神戸山美



個の中に倒るゝとも

田中次俊

讀者や同人に對する責任上、前號は無理を知りつゝ、身體を酷使したせいか校正を終ると同時に臥ついてしまひました。未だに藥餌に親しんで居ります。それがために本號は私の枕邊で二柳子君や葭乃が手傳ひ、莢豆君が編輯の面倒を見てくれした。そしてこの二頁は私のために殘して置いてくれたのですが、今のところ執筆が出來さうにもありませんので、畏友田中五呂八氏の私信を揭げさせて貰ふことにいたしました。氏は遠く北海の地にあつて獨力「氷原」を發行され川柳革新運動のために全力を傾倒されて居ります。(路郎生)

拜啓　三月二十三日附の長い御手紙を頂いたきりの御無沙汰です。其の當時はつまらぬ感情の使ひ方から飛んだ失禮を申上げた事を御詫致します。其後他意なく『川柳雜誌』も御送り下すつて寔に恐縮して居ります。何しろあゝした雜誌らしいものでも出して居りますと餘暇の凡そはそつちの方へ取られて落ついた手紙もつい書き兼ねるといつた譯で大兄へも御返事すら忘つて居りました。『氷原』を理解して頂いて鞭韃して貰へる人は極少數です。そして大兄がいつも『氷原』を心にかけて力づけて貰へる事を僕はどんなに喜んでゐるか知れませぬ。僕の議論や句やが、そんなに深いものでない事は百も自認して居りますが、僕が、今柳界の病弊を衝いて自己の論理の儘に動いてゐ丈でもが柳界の爲に何等かの結果を與へる事を信じて居ります。例へば僕が個の中に倒れる事があつても僕一個だけが存在した意義だけは殘したい考へで猛進して居ります。それは一般文壇から見れば目にも見ぬ小さな波紋だかも知れませんが、その波紋の集積は必ずや何かを物語ろ事でせう。

それにつけても大兄の小乘的軟化を心から殘念に思ふて居ります。大兄ほどの見識ご過去（揚柳時代の先見）を持たるゝ人が何を

苦しんで群盲を相手にお山の大將に甘んじて居られるのでせう。大兄を取巻いてる連中が如何に多くとも路郎一個の眞慣は決して加餐されるものではなく、むしろ大兄の眞意を疑はるゝもの多きを畏敬する先輩の一人であるあなたのために惜まずに居られません。あなたの肉身とも云はるゝ日車氏にせよ半女錢氏にせよ。あゝした苦闘の渦中に敢て投じてゐるではありませんか。

全くそうした急進的な渦中に投ずる事は結果を思はざる早計とも見られませうが、革新は決して革新の日に成るものではありません。革新に纏く革新の細き糸がもつれ合ふ、ささやかにして貴重なる努力の堆積が凡てを成と遂げるのだと考へて居ります。勞資協調等と云ふ微温的な糊塗主義が、どんな徹底した結果をも殘さない如く、川柳の漸進主義は、その主義自らの爲めに過去の幾人かゞ傷ついてゐるではありませぬか。こんな事を大兄へ申上げるのは過ぎた說法ですが、凡ては大兄の現在を惜む僕の眞意です。此場合僕が大兄の仕事を賞て自己を僞る氣になれぬ理由も茲にあるのです。

こう云つて仕舞へば何だか手紙の上で喧嘩でも賣つてるやうですが、僕が如何に愚なりと雖も知己の人に食つてかゝるやうな事は出來ません。現在の立場が違つて居やうとも、『氷原』を、私を勵まして下さた友情に對しては、私も弱い一個のディレッタントに過ぎませぬ。どうか私に餘り氣を揉ませぬやう、漸進主義の効果を實現して行つて下さい。私の信ずる路郎氏は決して今の儘に滿足してる人ではない事を深く信じて居ります。私は當分あなたの仕事を傍觀して居ります。然し『氷原』に對し、私に對しては酷しく批判し、ほんとうの鞭を惜まれぬやう心から希つて居ります。

あなたの創作は怠らず拜見して居ります。そしてあなたの生活が見ゐるやうに考へて居ります。あなたは今川柳家としても又人としても所謂圓熟の境に入られつゝあるやうに思はれてなりませぬ。だから大兄の創作には若々しい情熱が少いかはりに、虛子や藤村等の心境の如く生活を生活のまゝに樂しむと言つた落ついた境地がよく現はれて居るやうです。

畫の風呂泳ぐ氣にさへなる父よ

或る雜誌に色々な共鳴や批評があつたやうですが、いづれも見當異ひのやうに思はれました。

こうした父を意識する大兄の心境が僕には圓熟しつゝある安心境のやうに思はれます。それは永い間川柳に生きられた大兄が必然の自己に還つた詩の故鄕ではないでせうか。いづれにしても私は、大兄の創作をいつも『川柳雜誌』の雰圍氣から引離して、人としての大兄の境地を味はつて居ります。言つて好い事だか惡い事だか知れませぬが色々な事を申上ました。向後どうかお互飾らずにお附合ひ下さらば幸です。そして若い僕の爲めに良い鞭を惜まれぬやう、心から希つて居ります。

北海道は寒くなりました。小樽にも再三の雪を見ました根雪になるのも近い事でせう。凡てに御自愛下さいませ頓首（十一月五日）

柳翁忌

九月廿三日於端之坊

九月廿三日は初代川柳翁の百三十五回忌に相當するので我社では故人偉業を追慕するため記念句會を催しました(二柳子)

路郎、日車、半文錢、蚊象、小鼓、長人、双柳、柳骨、波郎、蝶哉、夢路、文久、かほる、廣賀、助六、駒人、笠人、秀哉、美の作、百石、十字路、凡平、一洲、彩霞、一笑、一休、琴月、一醉、金平、蕭流、しげる、悠々、鳶歩、刀三、光太樓、馬行、松郎、松雨、莢豆、五葉、輝翠、古城山、二葉亭、白柳子、二柳子、(名簿より)

年寄(兼題)　路郎選

雑談をちゝ年寄はうるさがり　嶺月
抜路次を年寄らしう先にたち　蝶哉
ふとした事から年寄呼出され　蕭流
結局はまた任されるお年寄　輝翠
年寄はマア〳〵ですませる氣　悟郎
永らへて孫と一緒に邪魔がられ　十字路
相談となつて年寄中に据ゑ　秀哉
誰もゐぬやうに年寄留守をする　波郎
撒き捨てる水の重さに歳をとり　文久
年寄はかうなる事を知つていひ　しげる
文化村椅子に母親ちゃこまり　美の作
年寄の手すさびといふどろゝ店　水府
お爺さん釣の道具を椽へ出し　五葉
年寄に飜譯をして聞かす事　笠人
年寄に聞けば暦を見ると言ひ　同
疑つた事が年寄氣に入らず　古城山
眞險に訊くと年寄さて困り　同
(佳)老たりと雖も云ふ腰を伸べ　鳶歩
よく變る家と年寄見て通り　一笑
あばら骨立派に見て祖父は死に　小鼓
年寄にされて女關先へ出る　松郎
こしよりの面倒鶏の糞ほどに　半文錢
一合の酒に白髪の數をよみ　日車
年寄りのお菜が一つ別に出來　五葉
年寄は手數のかゝるつりをとり　水府
年寄は離れへ逃げるように行き　琴月
年寄を安心させる酒も買ひ　同

○

まだ嫁に洗はさぬもの二つ三つ　路郎
古い値をいふて年寄値切るなり　同

年回(席題)　五葉選

一周忌再婚説か記事に載り　美の作
年回に一度逢ひたいよくが出る　長人
年回の度親類は若くなり　蚊象
一周忌子供は無事に育つてる　彩霞
一周忌もうあれからも一人減り　馬行
兄らしいことは年回知らして來　路郎
年回に姑の愚痴を聞いて去に　柳骨
年回の日を女房に教ゆられ　刀三
母親の好みのまゝの年祭り　古城山
極道もやつぱり來てる七回忌　笠人
三回忌父が愛した松の鉢　松雨
年回をすまして兄は江戸へ行き　駒人
内職はなんにもならず七回忌　一醉
七回忌太平洋をもごつて來　凡平
一周忌高下駄で來て思ひ出し　蝶哉

名を替へて勤めた意地の一周忌　文久
もう柿の出る時分なり一周忌　同
年回に家寶の地獄繪を見せる　小鼓
年回に水も捧げて恙なく　同
(佳)年回にすこし遲れて姉の聟　日車
年回に古いお出人報らされる
昇給もせずに年回近くなり　刀三
年回を思ひ出すほゞ金をため　路郎
(人)年回もすんで親類からすゝめ　悠々
(地)一周忌許さなかつた事を悔　琴月
(天)年回を迎へた母は痩て見ね　駒人
(軸)年回に姉も五十の阪を越ね　五葉

薄情（席題）　日車選

薄情を涙で今日も眺められ　波郎
薄情な人の羽織をだきしめて　同
薄情な薄情な音正確に　小鼓
壁壁顔狂院へ來ても壁　同
薄情へさみしい笑ひなげかける　路郎
薄情に何やら摑み切れぬもの　古城山
うらむにはあんまり高い塀の内　莢豆
薄情が一歩財布の中を出る　松郎
薄情な輩の中に一人立ち　夢路
眞似ごとをする薄情者は去ね　文久
薄情な人長靴を穿いて去に　蝶哉
薄情を恨む涙に乾き切り　百石

○

きつぱりと薄情だけを貸してやり　日車

灯（席題）　互選

灯が二ツ三ツに見ねて醉ひまた　夢路
無理云て消畫提灯に灯をともし　同
灯を消せば泣きたい樣になり　長人
蠟燭をともしてみなにだまらせる　同
諸菩薩の後光に屆く灯ともなれ　半文錢
ちぢぢぢと灯にも時刻は進む也　同
灯の下々疊の上より五尺也　同
ともしびに寄る貧乏の面白さ　路郎
ともしびをさへぎつて飛ぶ膝の猫　同
見送つた後灯をふつと消し　二柳子
灯が女關までゝ消ねるなり　同
灯がついて話ごうやらかたをつ　一醉
灯がついてみれば出たくなり　同
思ふ事あらず灯中にして　馬行
人間の住んでる處灯がともり　同
袖口がまくれたまゝに灯される　松郎
灯に遠く不平を持つてゐる　同
灯に草臥れ切つた足を上げ　古城山
灯に弱い自分の影を見る　同
うす暗い灯でうごんやはつきり出し　松雨
灯を消す曲者の眼は光り　同
灯が一つ我家の井戸の底　日車
ふつけせば消せる灯なりけり　同
灯を消すと冷たい風が來る　刀三
灯が搖れて誰かが來る氣配　同
倉の戸をしめて灯消ねたまゝ　悠々
お開きに女關へ手燭ともされる　同
住職の留守ども見ねぬ灯の明り　凡平
油ぎる顔の光りと灯と　文久
荷物船心ばかりの灯をともし　しげる
白狀をするに灯の明るすぎ　美の作
海岸で灯一つ見て歸り　駒人
灯が音して我にかへるなゝ　光太樓
ともしびを消せば如來が目に浮び　莢豆
停車場に近く灯左右に見　秀哉
泣きはれた眼に灯がぼと見ね　一休

消へなんとして灯のゆらぎなり　十字路
物思ひふと燈明の灯を見上げ　百石
心配の内に灯消ねてゆき　波郎
地獄とも極楽ともなる灯が一つ　蚊象
灯の搖らめくまゝに髪をとき　水府
貰い風呂小供灯ちたされる　廣賀
廊下行く灯部屋の陰動き　助六
線路番灯をともしても暗いなり　薫流

（席題）　互　選

花

漂泊のように浮草花が咲き　琴月
投込んだ花が流儀にはまってる　しげる
次々に咲き揃はせる看板屋　馬行
お供して危いところの花を折り　刀三
開墾地草に憐な花が咲き　美の作
ツボミから買ふて書齋で花が咲　一笑
花びらがはつきりとして土の色　彩霞
おみなへしお菓子の欲しい顔で　莢豆
戀の手でもぐ花瓣の面白し　古城山
洗濯に日車こちら向いており　悠々
屋根越ねて來た蝶々に花一つ　一醉
咲き出づる花へ恵の日の光　十字路
蝶々も毛虫もとまる花であり　かほる

第八第十支部句會

九月九日午後六時から、神戸市大倉山安養寺にて、川柳雜誌社第八支部、第十支部の句會を開催した。當日の出席者は路郎、古城山、輝翠、松雨、徹底郎、莢豆、二柳子、紋太、鶴太郎、羽法師、苦可、琴月、紫灯、契柳、一狂、なまづ、登利、清公子、喜文、青波、濱太郎、露溪、東洋鬼、俊坊、稻次の諸氏と私（彩霞）

兼　題（風鈴）　路郎選

風鈴に飽かれ父親鼠になり　助六
風鈴を買つて歸ると子持なり　東洋思
風鈴屋二階の障子開けさせる　俊坊
晩酌に風鈴平和な音を立て　喜文
風鈴屋今にもめゆる音を立て　青波
泣き止まぬ子を風鈴に突きつる　彩霞
風鈴は客間ではないとこで鳴り　徹底郎
ふつゝ氣付いたやうに風鈴が鳴り　莢豆
風鈴屋涼みの町を狹く來る　鶴太郎
叱られて出て風鈴の鳴るを聞き　琴月
風鈴の下へ拗ねてる妓はかゞみ　紫灯
色町をゆつくり廻る風鈴屋　露溪
風鈴が大きくゆれて九月なり　同
風鈴屋荷が歩いてるやうに行き　なまづ
風鈴屋默つて吹かれて居ればし　同
風鈴屋前と後の灯がもつれ　契柳
風鈴屋歩くと無暗矢鱈鳴り　同
風鈴屋怖々歩くやうに見ゐ　同

席　題（香水）　紋太選

香水をつけて娘は叱られる　稻次
旅行にも香水を持つ若さなり　苦可
肌襦袢から香水のいゝかほり　紫灯
香水の主を課長を知つてゐる　なまづ
口笛を吹き香水のあとをつけ　琴月
香水を振つて寢てみる一人者　清公子
香水を振つてくれるも女なり　輝翠
挨拶の鼻へ香水匂ふこと　同
びろうどの箱の香水大分へり　鶴太郎
香水を氣が遠くなるほどに嗅ぎ　同
妹の香水そつとつけて出る　彩霞
客れた香水を振る食客　同
妾宅へ來て香水屋一つ賣れ　松雨
香水と聞いて親仁の澁い顔　同
逢ひに行く帽子へ香水を忘れず　東洋鬼

香水を憎らしく嗅ぐ敵　同
香水は誰だ〳〵と五六人　同
香水の名を知つてゐる色男　露溪
香水は佛蘭西製を繰返し　同
窓側へ來て香水の主が知れ　同
ハイカラが乘り香水の匂ひがし　一狂
全身を香水化する色男　同
香水で少しは若い心持ち　同
香水を姉と妹別に持ち　契柳
香水の栓を亭主にあけさせる　同
知らぬ間に香水を買ふ樣になり　同
寢間香水にのほせてる若旦那　路郎
兄さんの辭に香水たんと持ち　同
香水も少しは匂ふ母の部屋　同
(人)戀人の匂ひ香水だけでなし　同
(地)ハモニカの側に香水置てあり　徹底郎
(天)冗談のはづみ香水みなこぼし　俊坊

軸

女房の豆香水が洒落れて見ゐ
赤箱に極めてまんねと匂はせる
常住座臥に香水を匂はせる

席題（落籍）　古城山選

落籍される氣を戀へさせる　紫灯
父が來る我物とすれば何でもない女　なまづ
落籍された母子二階を貸して住み　俊坊
されて一人の夜を淋びし　東洋鬼
落籍の時にほんとの年が知れ　露溪
落籍される妓へ朋輩の疎くなり　鶴太郎
落籍されてねざめの惡い日を暮し　彩霞
金のない方へ落籍して貰ひたし　徹底郎
冗談と思ふた方に落籍される　同
身受けする金もないのに尋ねて見　同

○

落藉金母親の手に合ひ兼ねる　弱法師
落籍す妓へ姑の事念を押し　鶴太郎
落籍されて心にもない字の稽古　路郎

席題（牛）　互選

のつそりと牛は土用の道を行き　苦可
叩かれて牛この角を知らぬのか　なまづ
牛の糞遠足隊の列が切れ　鶴太郎
戸を開けりや一番先に牛の糞　清公子
屠牛場今日か明日かの牛ばかり　一狂
立話牛そこいらの草を喰ひ　琴月
牛のそば汚ない尻を見て通り　紋太
賣られ行く牛は夜中に町へ着き　弱法師
直ぐそこに牛が鳴いてる田舍驛　露溪
牛ひいた柄に似合ぬ節廻し　喜文
牛でひく馬力よつほど重たさう　稻次
着かざつた牛峠で休むなり　俊坊
汝牛食の一字と悟りしか　莢豆
踏切で拗ねてる牛に困るなり　二柳子
鞭一つ喰つて牛も落ちつけず　輝翠
牛の顏何の不平もないらしい　古城山
田の中へ牛を殘して畫にする　紫灯
追ひぬいて行くて牛方氣に止めず　東洋鬼
默々と唯默々と牛を追ひ　同
子に牛を引かせて先に歸らせる　契柳
提灯の明り牛小屋丈け照らし　同
子を抱いて牛小屋に來る里歸り　彩霞
近道の眞晝に怖い牛が居る　同
怠けてる樣にも見へる牛の顏　路郎
今日中に着いたらよいと牛思ひ　同
小走りに小牛の足がもつれて來　徹底郎

ある時は牛拗ねてみろ氣にもなり　同
牛の尾が虻に不意打喰はすなり　同

席題（巾着）　互選

腸のやうに巾着つかみ出し　露溪
巾着に詰られてゐる守り札　琴月
巾着は御先祖樣の好みにて　古城山
巾着へ入れるに惜しい新の紙幣　鶴太郎
巾着の中へ簞笥の鍵も入れ　紫灯
巾着を何かとみればハジキなり　清公子
煙草錢とって巾着さア放ろぞ　弱法師
巾着を出すのを車掌まち遠かり　東洋鬼
巾着が内懷で汗をかき　一狂
巾着が思ひ掛けない紙幣を出し　俊坊
巾着の重みが首へちと掛り　同
値を決めてから巾着の紐をとき　契柳
巾着が解けず八百屋は待ってゐる　同
巾着の殼串柿の樣に締め　紋太
巾着を子守しっかり持たされる　同
巾着へ後生を願ふだけの金　路郎
巾着へ舞妓は舞妓だけの金　同
巾着を締め〳〵用事言ふておき　徹底郎
手洗鉢巾着を置くとこがなし　同
巾着を拂へば春の米が落ち　同

第十二支部句會

九月廿一日夜例會を開く。
喜多坊、千波、東魚、八郎兵衛、一樹、夢之助、潮三郎、都ね尺、惡可樓、笑劍坊、利喜馬、茶化子、二三吉、ぱん蝶、吐根舍、柳友、花童子（函館にて、龜井花童子）

席題（飛ぶ）　互選

生きてゐるやうに紙つ屑が飛び　柳友
つかまつた鳥鳥籠の中で飛び　都ね尺
花の蝶羽のあるのを忘れさう　一樹
吸殼を捨てれば火の粉少し飛び　喜多坊
大吹雪飛び込むやうに姉歸り　東魚
蠅取紙蠅あくまでも飛ぶ氣なり　利喜馬
飛んで行く俺の若さが飛んで行く　八郎兵衛
もがいてゐるやうに風船つながれる　笑劍坊

席題（考へる）　都ね尺選

考へたまま代數は寢てしまひ　東魚
考へが決って笑ふのが聞ね　同
考へる樣にコスモス首を垂れ　八郎兵衛
口實を考へながら昇る段　潮三郎
箱抜きの男胡座を組み替へる　一樹
纏まらぬ頭に髪が邪魔になり　同
夕河岸へ思案にあまる胸を抱き　夢之助
考へて居れば敷扈減つて行き　柳友
本當に考へこむと眼は見ねず　吐根舍
通譯は考へながら吃つてる　利喜馬
考へに沈めば闇に吸はれさう　喜多坊

席題（陰氣）　東魚選

老舗だと云ふ店ぶこか陰氣なり　吐根舍
中二階暗く梯子が足に鳴り　都ね尺
石造の質屋の奥の窓明り　潮三郎
古着屋は間口一杯ブラ下さげる　喜多坊
佛檀の灯を消し追はれさに出る　一樹
氣を變て見る氣笑つてなほ淋し　笑劍坊
寺町へ來て干からびた花を見る　花童子
奪はれたやうに退院した隣り　柳友
雨洩の汚點を留守番フト見つけ　一樹
親一人子一人しんとして暮る　八郎兵衛
商用で行くに陰氣な裁判所　吐根舍
暴落をおづ〳〵と聞く女房の目　千波
森近く來て捨て猫の目を見る　都ね尺
昨夜かり皆病院へ行ってます　潮三郎

廢坑を覗けば何か匂ふやう　東魚

席題（魚屋）　夢之助選

魚屋を叱つて遲い飯になり　一樹
魚屋へみつくろはせる客が來る　東魚
門燈が壞れてますと魚屋來　潮三郎
庖丁の切れ味を見る鮭の骨　花童子
魚屋は鱗のついた剩錢を出し　喜多坊
新宅へ鯛が跳ねてるやうな聲　千波
肴屋に何やら女中ひやかされ　夢之助

席題（役者）　花童子選

旅先の不入りに一座から脫ける　二三吉
女給部屋田谷力三を引伸ばし　潮三郎
本當に歲を忘れる當り藝　笑劍坊
道具方なぞを加へて義士が出來　夢之助
銀座の灯呀ッ諸口だ諸口だ　潮三郎
樂屋風呂ふと衰へた肌を見る　東魚
市川の流れを汲んで縫ひぐるみ　夢之助
何時でも舞臺に歲を生きたい日　笑劍坊
雜妓同志もう慶ちやんが通る頃　潮三郎
驛驛の灯に一群れの旅役者　夢之助
引眉毛らしく小料理屋へ這入り　花童子

第十三支部句會

十月一日午後六時から、平野鄉平野倶樂部で、川柳雜誌社第十三支部の句會を開催した。當日は本社からの後援もあり、且つ又柳界のために熱心なる、諸氏の御盡力によつて意外の盛會を極めた。參會者は路郎、松郎、溪花坊、刀三、白菊、兎月、春汀、冷笑、眠聲、駒人、竄月、美登利、秀哉、廣賀、かほる、凡平、柳骨、二柳子、芦穗、輝翠、古城山の諸氏と私の二十二名であつた。（助六）

兼題（母）　路郎選

つぎ當て迄ん着させる母となり　十字路
連れて來て母ちついでに顏をそり　白菊
針仕事母はあれでも着る氣なり　眠聲
ほつとして白梅を吸ふ母であり　かほる
未だ母の美しかつた寫眞見る　刀三
母一人子一人になる苦學生　春汀
夢の間が早や三人の母となり　兎月
無心狀母にもよめる樣にかき　助六
嫁やつと母の言ふ機會かあり　溪花坊
母と來た道頓堀の物足らず　凡平
現代の思想に母は負けておき　秀哉
こもすれば母親本當にも叱り　輝翠
公債も一枚持つた母であり　松郎
（人）或時は母が出世の邪魔をる　刀三
（人）相談を母丈にする姉となり　駒人
（地）單衣物母を淋しく見せて居る　芦穗
（天）すいた人兄第が有る母が有り　凡平

席題（近道）　溪花坊選

近道の方で葬式一つ逢ひ　柳骨
近道を行つて着物へ稻がすれ　兎月
近道は山切り取つたこも有り　助六
近道を通り芝居の裏へ出る　秀哉
近道へ來たのをくやむ車なり　同
近道をすぎて明るい町續き　駒人
近道に渡しはいんま出たところ　眠聲
近道は三尺ほどの溝を飛び　凡平
近道に露次のあらはを見て通り　同
下駄の齒を缺いで近道拔て來る　輝翠
近道が線路工夫に叱られる　同
近道へ廻るこゑらい水溜り　松郎
近道に畑が少し續くなり　同
近道にされてる敷地賣りに出し　路郎
近道の方で時雨に逢ふてゐる　同

(人)近道で大きな犬に吠られる　松郎
(地)一組か近道を行く講まゐり　かほる
(天)近道を足の達者な者ばかり　芦穂

席題（玉突）　古城山選

ゲーム取あア突いたらなこ思ひ　かほる
夜の明ける頃玉突き屋騒ぐなり　柳骨
閑な事ゲーム女も一ッ突き　秀哉
何が面白いのやろこ玉突き見る　刀三
玉突へ妹らしいが呼びに來る　廣賀
玉突に袷の袖か邪魔になり　凡平
ゲーム取今夜寢むたいなこ思ひ　助六
玉突に凝つた時代も有る箱屋　芦穂
だいぶ突け出して夜更ら氣がつず　同
家事も納めずに百ほど突て來る　溪花坊
落第をして玉突きで顔が賣れ　路郎

以下二點

いつ稽古したか重役五十突き　同
碁に負けたのが玉突き見に降り　溪花坊
便所から見ゐる玉突屋の世帶　松郎

席題（天井）　互選

天井をほめつゝ冷たお茶を呑み　駒人
暗記する眼が天井へそゝがれる　芦穂
神農も住吉もつる天井なり　路郎
天井のこゝのもやはりそつてる　かほる
院長が歸つて元の天井をみ　松郎
天井を賑やかにする店開き　かほる
裏張をした天井の廣く見ゐ　輝翠

席題（水車）　互選

水車こ言へば涼しさうに思ひ　同
ふみながら挨拶してる水車　秀哉
水車鮒が一匹揚がつて來　凡平
水車小屋此處からさきは道が切れ　古城山
水車丈働いて日が暮る　溪花坊
水車だん〳〵登る樣に見ゐ　駒人
ごうしたか今日水車止まつ居る　同
水車月のあかりに踏んで居り　廣賀
水車小屋迄も電氣は來て居ず　同
水車小屋の所で牛こすれ違ひ　路郎
水車小屋女の聲もする所　同
水車漏つてる樣な音をさせ　芦穂
秋の日をせかずさわがず水車　同
八朔の風が水車へ心地よし　同

席題（毛布）　互選

敷き樣によつて毛布の派出に見ゐ　溪花坊
陽當りで毛布を拂ふほこりなり　同
たゝまれた毛布に蒲座のほこりなり　同
寢臺の毛布がずつて夜が明ける　同
もう起きたらしい毛布が干てある　路郎
花見茶屋毛布はおなじやうに　同
すゝめられ女毛布の端に乘り　同
トランクの他に毛布がかさを　眠聲
桃の花赤い毛布をひいて呑み　同
寢臺車ラクダの毛布の端がたれ　同
二ッ目の車窓に毛布たれて居る　駒人
借りて來た毛布にすまぬ事が出來　同
拘留の毛布に外は雪となり　秀哉
荷造りに破れた毛布役に立ち　同
一枚の毛布に宴を開くなり　黎笑
病人の腰に毛布は放されず　同
物干で竿一ぱいの毛布なり　助六
俄雨二人は笑つて毛布着る　兎月
毛布敷きかけるこ子供上つて來　古城山
落ち附いて寢れば毛布の溫かみ　輝翠
よごれめの見ゐぬ毛布を買ふため　柳骨
病人の毛布こなつて仕舞ふなり　松郎

川柳略語解

西原柳雨

萬句合其他の柳書を讀むうちに多分略語ならんと思はるゝ不可解の辭を控へて置きたるものに愚見を附して茲に發表し大方の贊否を仰がんと思ふ。

鶯の糞で小さむは錢もうけ

小さむは小侍の略なるべく、鶯の糞を溜て置いて女中などに賣附けるとならん

きま坊と見ゐて息子の一人行き

（安永、三）

きま坊は氣儘坊の略なるべく人と連れ立つて行くは異見の衝突など色々と面倒なことが起るのでいつそ獨立獨行がよいと云ふ息子なるべし『戀にはなまゝ供は邪魔』と梶原源太を極込む色男ででもあらうか。

呼だだつけが仕合せな御新造

呼だは呼出しの略なるべし。あの御新造はもと呼出女郎であつたがこ氏なうして乘つた玉の輿をけなるがる世間の噂であらう。

二百兩持つて行ぎにこまつてゐ

（天明二）

行ぎは行ぎこの略なるべく、二百兩の持參附で貰ひ手がないとなるべし。持參は百兩が川柳句上の通相場であるのに二百兩と云ふからにはよく〳〵の牡丹餅と見ゐたり。

もてぬ奴とでもない時かたり出し

（明和二）

とでもはとんでもの略なるべく、何時迄待つても來ぬので糞燒けになり夜夜中に大きな聲を出して淨瑠璃でも唸り出したとならん。

色男國を五匁くれと云ふ（明和二）

國は國分の略なるべく、塲合は吉原行であらう。

大一座佛にほたをおつつける（明和二）

ほたはほたもち卽ち醜婦の略なるべく、一座中のお心よしが御多福を授けらるゝとならん。

村日待莊屋はごぶをちとすごし

（明和二）

のごぶは無論ごぶろく

さてぬるい出端だに嫁はききあきる

（明和五）

の出端は恐らく茶の出端の略であらう。

募集句

年増

近藤飴ン坊選

何事も呑み込んで居る年増なり　竹桑
若い妓に交つて年増素顔で來　月の輪
今時の女を年増嘲笑ひ　三四四
茶と花と針に娘は年をとり　凡平
いゝ女だが年増の話なり　盗泉
苦勞した話年増は聞かすなり　夢六
親切にされて年増が好きになり　琴月
下役の方が年増はもてなして　美濃守
もうこんな年増に誰がと己惚れ　駒人
飛び入りの年増はだいぶ呑める口　松雨
年増もう色や戀やの沙汰でなし　一休
親と名がつけば年増の髪になり　柳化坊
落籍されもせず此店で年増なり　彌生
白粉が禿げて年増の顔になり　波路
本當の年當られた年増なり　柳骨

盃へ年増嫌味を云ふて注ぎ　一柳
宴會へ年増も一寸塗つて出る　失名
久し振り逢へば年増の數に入り　眠聲
年増だけ矢ッ張口を先きに切り　双柳
古びては居ても年増の坊い洒落　一閑子
殘る香を時の大臣でられて　馬行
若いのと年増と二人逃げるなり　村夫
二つ三つ若く年増は見せるなり　二三吉
親切に云ふては呉れる年増なり　徹底郎
欺す氣の裏を年増にかゝれたり　句樂
人前を平氣で年増惚れさせる　同
云ふことのさすが年増と頷かれ　百石
逢狀が矢ッ張年増にもかゝり　同
口數の多い年増じよく忘れ　一洲
湯殿から年増は用を云ひつかり　同
手切れ金年増を恐ひものにする　零骨
お毒味は年増に輕い手付きなり　同

黒はぶの飛脚をのせて四手かけ　（安永九）

黒はぶは黒羽二重の略なるべく、黒羽二重と云へば大家の若旦那であるが、飛脚とは唯急ぐからさう云つた迄であらう。

鼻はとも伜はぜつぴ助ける氣　（文化）

こもはともかくの略なるべく、梅毒に罹り鼻は落るなら落ちても是非がないが、同年生れの伜だけは滿足に癒やしたいとの破禮句であらう。

もうかんにしなよと藝子とちぐるひ　（明和六）

かんにはかんにんの略是は川柳でなくても時に聞く語であるが、惡くしつ濃く巫山戲ら客と見ゐたり。

物云ひにすこ癖のある嫁をとり　（寶暦十二）

『すこ』は『すこし』にて是は川柳には殆んど實く用ゐられてゐる略語であるが『かくしても嫁來なんした里が知れ（文化）』の類句であた。

落ち付し年増若手をたしなめる　不越
場所馴れてズケ〳〵と年増云ひ　同
堅氣にはなれず年増のまた勤め　是々坊
遣る瀬ない年増此頃酒に生き　同
白粉の小皺に溜る年となり　寸馬
段々に妻となり山の神となり　同
末席へ年増は三味を彈きに來る　暮郎
若いのを去なして年増酔う氣なり　同
貯めて居るらしい年増へ又浮名　二拍子
盃洗で飲もうと年増酔を出し　同
子と呼べぬ子が二人ある女　同
笑はれる事に年増が割って入り　輝翠
好いこと年増捌いて歸るなり　同
朋輩に年増憎まれ口を利き　同
婦人科へ年増いさゝか塗つた顔　巨頭子
その中で年増の一人横着な　同
正體が知れず久しい年増なり　同
良い事も教へて呉れる年増なり　助六
算盤も少しはじける年増なり　同
冗談を云ふて年増はツイと立ち　同
好い咽喉を持つて年増と差向ひ　東城子
母親の目にも此頃年増なり　同
諦めて年増とシンに凝りはじめ　同
團體の年増の一人酒落を云ひ　同

人

別室へ年増は何か用が出來　光太樓

（評）大一座である、澤山藝妓も來てゐる其の中から年増藝妓の一人、別室で何かひそ〳〵と話す、話しの相手は客ではない、料亭の仲居か女將だ。用件の何であるかは讀者の想像に任せる。年増藝妓を拉し來つて、別室で何か特別の話をさせた所が働いてゐる。募集中の類句に「ひそ〳〵と女將年増へ耳打し」と云ふのがあつた。同想であるが此句は前者に比べて場所が現はれてゐない、それに「何か用が出來」の修辭の妙に及ばない句の推敲が大切であることが是でわかる。

酔つて來て年増は水を拜むなり　廣賀

（評）「酔つて來て」の上五を最初は、酔が廻つて來てと解した、豫選に入れておいて再考すると「酔つて來て」はどこか他の家で飲んで大酔して此の家へ來てと解すのが至當だと考へた。それで此の年増は藝妓だなと斷定した。年増藝妓が大酔してお座敷へ現はれるや否や「れいさん濟みませんがおひやをれ……」と云ふ其の樣子はと見ると、手を合せて仲居を拜んでゐる、それで酔態も窺はれる。尤も原句は「水を賴むなり」とあつた。私が「拜む」に直して酔態を描き出さしめた

あぶりこのありぎ敎て女房寢る　（安永七）

ありゝはありゝこの略なるべきも句義は少しく徹底せぬあぶりこは金網ならんが下戸の女房にてもあるか夫にしても先に寢る譯かよく私には解りません識者の御垂示を乞ふ。

まだ澤山あるであらうが一寸思ひ出せぬ十七字と三十一字と字數に制限あるものには適當の省略法が必要と思はれます。猶『ばかり』を『ばか』『妾』を『めか』『藝者』を『しや』なと云ふ省略法は川柳にありふれたる事なれば茲には申しません。

▲校正の日に

△『選及び選者』及び『句になら迄』は執筆者病氣のため休載いたします。

△御多忙とはお察して居りますが選稿は出來得るかぎり早く送り返して下さるやう各選者にお願ひいたします。

△締切日は嚴守して居りますので遲れぬやう投句家諸君へ特に申上げて置きます。（二柳子）

川柳書架（七）

柳樽

一輯（袖珍文庫第十五編）
二輯（袖珍文庫第廿五編）

▼一輯にかゝげてある『解題』を例によつて轉載して見やう。

解題

『そつと立ちけり〳〵』と云ふ句を出すするとこれに『行て寢いこいふが巽見の仕舞なり』と附句をする。『そこらあたりを見渡しにけり』と云ふ句を出す、するとこれに『掛取か又お留守かと先を取り』と附句をする。これが所謂前句附で、元祿頃から漸く盛になつた。この前句附の點者をしてゐた江戸淺草阿部川町の名主、拆井八右衛門、號を綠亭川柳といふ人が前句附の附句だけで意味を成して居るものを選んで集を作つた。これが卽ち柳樽で、初篇の出たのは明和二年。以來柳樽は雜誌の如く逐次上梓され、川柳と云ふ

ので「醉て來て年增は水を賴むなり」が所謂關西調の卒直な言ひ廻しかも知れぬ。「醉て來て年增は水を拜むなり」は所謂關東調の曲手を弄するものかも知れぬ。こんな所に關西調と關東調の研究點もあるやに思ふ。

地

三人の切符年增の手から切り　助六

（評）此の集はどうしても藝妓の句にいゝのが多かつた。此の句も藝妓である。三人を若いお客と若い藝妓と年增藝妓と見る。切符は勿論淸車の二等切符である。「年增の手から切り」で此の年增が取卷で萬事取引つてゐる如才なさが現はれてゐる。修辭にスキがない。

天

正席が年增と古いの〳〵話　巨頭子

（評）床の間の前へ招ぜられた正客を「正席」の言葉で現はしたのは巨頭子君が常に川柳用語に注意してゐる用意を見るべきである。此の正席の客は年輩者である。其の前へベタリと座つた年增藝妓、客は此の妓の若い時をよく知つてゐる。賣り出し頃をよく知つてゐる。それから當分會はなかつた。そして今晩久しぶりで此の席で見かけた。藝妓は「まあお久しう」と云つたであらふ。夫れからは客も藝妓も昔話、何や彼やと盡きない「古い〳〵話」の修辭も巧みである。此の句を調子の上から見ると古川柳調である古句研究に熱心なる「鯱鉾」と地を接して同一系統とも見るべき「よのころ」の巨頭子君が、古句研究に努めてゐる事は豫て知つてゐる。此の句は其の研究に依つて得たる「アラハレ」である。古句研究の應用を斯く活かした一例として多くの作句家に此の句の方面の研究と活用とを此の句をとほしてお薦めする。

選者　吟

遠く望む淡路島山年增眉
婆こ呼ぶ妻『良人の危險時代』
こめかみへ手が行き年增臭くなり

山

安川久流美選

瀧の音聞いて釣を一つはめ　茶厘坊
山近く住み園藝に趣味を有ち　竹榮
山へ來て見馴れぬ草を嬉しがり　助六
此山を越すにゲートル卷き直し　同
もう山も見ねくなつたデッキ也　眼聲
山門の中から別な石だゝみ　喜花
心地よく山の空氣は吸ひ込まれ　同
藝術に憧れ山家あこにする　不越
山越ねてでも嬉曳をする氣なり　呑氣

登山こは都の人の御道樂いさむ　山火事は恐ろしい程廣くなり　廣賀
標本にするのを山へ取りに來る　同
秋の山障子をあけて氣をはらし　劍呑坊
大學へ入れて三つも山を賣り　雅幽
登山服嶮しい方の道へ出る　同
行幸の御眼に山の多い事　松郎
山へ來て立てるこ旗も生て見ね　同
甲板で山の話を嬉しがり　山月
禿山に引きぬけさうな松が生ね　琴月
雄然こ女夫のやうな山の峰　同
深い山こんな所に墓があり　同
團體が騒々しくも山を越ね　同
遠山は苦か生ねてゝやうに見ね　久樂
今日越した山を見ながら呑める　秀哉
山へ來て怒鳴つて帰たら怒鳴られる　二葉
靈魂のやうに山から月が出る　一休
火山脈先生赤いチョーク出し　鳶歩
山越ねたやうにも見ねる奴凧　しげる
こんな山に遊んで見たい軸を見る　十字路
山のある方へ犯人足が向き　吐露坊

三才（逆順）

神戸琴月
きみわるいものを松茸山で踏み
大阪馬行
中腹へ氣よぐれらしい家を建て
大阪芳月
歩いても山は却々近寄らず
軸
熊の餌になる氣で近い山を越し

（附言）「山の神」とか「借金の山」とか「人の山」とかはぬきません　[illegible]「山」とい
ふ題が出たら「山」のこ[illegible]ばほ
んとうだらうと思ひまして……
（十一月八日未明）

妾宅

鶴井花童子
吉川啞人　共選

花童子選

お越しらしい妾宅の三味が鳴り　百石
入智恵の小僧妾宅への使ひ　愚劣
妾宅の方へ呼ばれる菅薫屋　美の作
百ケ日まづ妾宅の片をつけ　同
妾宅で氣張る青年團の寄附　三巴

▼本書一輯の内容は　誹風柳樽の第一篇から第六篇までを收め、二輯は第七篇から第十二篇までを收めてゐる。一輯は明治四十三年十月二十八日發行。四六半截三三〇頁。定價二十五錢。東京市神田佐柄木町三教書院發行。二輯は明治四十三年十二月二十八日發行。三四四頁。定價及び發行所は一輯に同じである。

▼本書は多少の誤植を散見するけれども、ポケット用として便利である。しかし古本として時々見つかるに過ぎない。

立退きをされて妾宅哀れなり　俊坊
妾宅の前で妾の子を泣かせ　一兵
妾宅へ來るを佛のやうな人　元山
この路次に妾と云ふが一人住み　東城子
栖鳳の畵は妾宅の方へかけ　同
退屈な妾に座敷廣すぎる　二三吉
妾宅で旦那は猫の事で揉め　不越
湯豆腐にお妾三つ程すごし　青戀子
お妾の無心茶の間の湯が沸り　同
妾宅と俥屋何か言づかり　十字路
(五客)妾宅へ共に稼いだ人が來　凡平
用もない電話妾宅一つ持ち　美の作
妾宅へ母親恐る〳〵來る　秀哉
書留の判妾宅で暇が要り　柳路
妾宅の門まで眞面目すぎる顔　馬行
(人)妾宅の塀に子供でない手蹟　秀哉
(地)妾宅の緣を走つて倒かゝり　しげる
(天)妾宅で按摩理屈を云てみる　松郎
妾宅で半日小間物屋の御用　花童子
妾宅の門へ下ろした漬物屋　松郎

啞人選

妾宅へ更科からの出前が來　助六
姉藝者妾宅へ來て少し借り　美の作
用も爲い電話妾宅一つ持ち　同
妾宅の方へ呼ばれる骨董屋　同
妾宅の方には坊が一人あり　東城子
栖鳳の畵は妾宅の方に掛け　同
妾宅に煙草の老舗たのまれる　放馬
好い空家妾宅向きときめて過ぎ　夜調
この雨に妾宅矢張殘るらしい　同
妾宅で魚屋の聲大き過ぎ　月の輪
妾宅の外燈文字が書いてなし　同
妾宅の畫は靜かな母一人　薫流
妾宅へ行くに旅行の支度なり　同
妾宅と見くびつている二階借　琴月
妾宅へ來るに足音しのばせる　同
妾宅へ丁稚は行つて土產也　天魂
妾宅の畫間はこゝりこもさせず　乾坤
畫宅は選擧違反の策源地　三巴
妾宅は案外瓦斯の要る所　同
妾宅で或夜算盤貸せと云ふ　同
妾宅はごのレコードも氣に入す　同

大阪讀込みのくぢ

きです。作者は一行々々違ひますみんな偉い人(？)の寄合ひで出來たものです打つけに讀んで見ると何んだか意味があるやうにも思へて滑稽です。春の夜の徒然にこんなことをして遊んでゐる千金の子もあるんですよ。羨ましく思ひませんか。但しこれを讀む時は聲色でお願ひします。

お前を此處に松屋町
度胸を据へて思案橋
お前とならば九郎右衛門町
新地へ惚れたわしじやもの
堀江すぎたが仇となり
茶臼にすると坂まちと
千日前から氣もうつゝ
それ樂しみに北堀江
九條言はずに俺と北濱
きり〳〵だかれて寢屋川だ
何の事だか靄ッ張り判らないやうで一脈

空想をやめて妾宅三味を彈き　不越
妾宅へやる氣で買ふて見つけ　同
妾宅は妾宅らしい構へなり　瀧亭
出前持チラシ旦那を見て歸り　夢六
妾宅の裏に夜更の頬冠す　馬
妾宅の其夜も無事で朝に成　元山
出前持妾宅へ行く氣の輕さ　三葉亭
妾宅の方へ便りが先に來る　凡平
妾宅も德用マッチ使うなり　同
追返す樣に妾宅錢をやり　吐露坊
默って妾宅矢張起きてゐる　同
妾宅へ急用と云ふまわしらの　一柳
妾宅の樣に船長歸つて來　山月
妾宅へ押賣りに來る本椿　柳路
妾宅の番地いつしか妻が知り　俊翠
長唄のレコード妾宅買ひに來る　一路
妾宅に開業させる小料理屋　竹桑
まだ起きてゐる妾宅の窓灯り　青惡子
妾宅は格子へ油引いて居り　しげる
酌をしてゐるお妾の肌の色　村夫
妾宅は夢見の惡い頭痛膏　雅幽
妾宅へ呉服屋クドウ〳〵來る　蟬翠
妾宅は細書たけを持つて居り　廣賀
妾宅の塀うららかな日が當り　嶺月
妾宅に五つ六つを若うゐる　馬行
妾宅で五六日寢る風邪を引き　同
妾宅の雨戸に朝日のほつてる　喜花
(人)妾宅もおくれ乍ら旗を出し　百石
(地)妾宅の時計旦那が來て動き　助六
(天)張板はまだ妾宅の塀を借り　二三吉

拾五年間の不思議

松雨

今を去る約五千五百日程前から一つの不可思議な謎がある。私は元各地で新設の電灯會社の電灯工事を請負うて出張したことがある。其頃からの研究でありますが未だに其理由が判らないけれども必ず好くないといふ事丈は確めました。それは線の赤い電灯の笠をつけることである。今迄に何事もなかつた方は此上もない幸だが未然に事を防ぐといふ意味からでもつけて居られる方は取かへて下さい。初めて世間へ發表しました特に柳友諸士にお勸め致します。なぜ好くないかといふ質問は止めて下さい。只實際を及く經驗したのに過ぎません。それでも譯が開きたいとおつしやるなら神樣にでも御何ひして下さい或は御存じかも知れません。

の通じる處があるのも面白いではありませんか。

次に新派の分を御披露しませう。

○男といふものは何故この樣に浮氣つぽいものでせうね。

○眞實にわたしのハートが燃えてゐるのよ。

○アラ隨分だわ、あたし、じれつたいわチー

○私のこのハートの血の色のやうな赤い赤い戀は、

○白蓮の樣に氣儘なことは出來ませぬ。

○並べた肩を思ひ出してゐるのよ。

○石の床石の枕に私はめざめたのです。

○妾と逃げて頂戴な。

舊劇と比べて、新派劇はまさまりがつきかねてゐますが、ある女が何か語つて居る樣に思へるでせう。(匡底より)

金を拾つた話

黑木莢豆

世智辛い世だと一口に形づけられても別に異存のない世の中ではあるが、その世の中にも嬉しいことにはちよい〳〵まのぬけたところがある。木村半六君が金を拾ふのをみてもそれが判る。

半六君は呑氣なことにかけてはあまりひけをとらない男である。或雨の降る日その半六君が俥に乘つたと思ひ給へ、俥の蹴込の上に五十錢銀貨が一つ光つてゐる降りるときにやをら手を伸ばした半六君は、拾つたまゝの手を引き込めもせず車夫公の掌へそれをのせて『御釣りはよろしい』と豫裕のある顏で言つた、俥屋の頭は輕く輕く動いた。

或る夜のこと半六君は六甲苦樂園にある自分の部室で仕事をしてゐた、否仕事をしてしまつてゐた仕事がすんでホッとした顏をなでつゝ最後の一ばん大きなあくびをしかけた。と、ちようどその時朝の電燈がパッと消えた。呑氣な半六君は暗闇の中で心行く迄そのあくびを續けたことであつた。

流石に呑氣な半六君も徹夜したお蔭で頭がカラカラに干いたやうになつてゐた。新鮮な朝の空氣を味はひたいと思つたのかだうかは知らぬが、やがて戸外へふら〳〵と出た半六君は未だ明けやらぬ模糊とした紀淡海峽を遙に見渡しつゝ冷やゝとした朝の砂を踏んで歩いて行づた。

と其處に遊動圓木が一つ淡暗い顏で眠つてゐた。半六君は六甲山の朝は此一角から明けはじめるのだと言つた風にと思ひ切りゆり動かした一番近くに住む鶯鳥が第一番にギャア〳〵と勝手の違つた泣き聲をあげた。遊動圓木のひとふりひとふりに眼にみゐて夜は明けて行つたのであ

つた。

やがて半六君は元氣よく遊動圓木へと飛び乘つたと同時にふり落された半六君の裸足の足の裏にはあまりにやさしくない砂を感じた半六君は、チッ、と一つ甚だ簡單ではあるが世界中どこの人間にでも通じる聲で意志表示をしたと、同時にうつむいて足許をみた。が其處はいつものまゝの砂地には違ひなかつた、けれども そのとき少し勝手の違ふものが一つ半六君の目についた。まだはつきり明け切らぬ足許の砂地に何かニコづくやうに淡白く光つてゐるものがある半六君は刹那にはゝアあれだなと思つた。だがしかしど も思つた。ちようど思ひも寄らぬ所で一寸知り合ひの若い女と顔見合した時のやうな氣持ちだつた。損のいかんやうな氣で、やあ今日はと言つた風に氣輕るに手を伸ばして拾ひ上げたのを十八度の近眼鏡の鼻先へ持つて行つてぢつとみつめたと其處から急にカッキリと夜が明け放れて新形の五十錢銀貨が一つ、自分の存在を認められた嬉しさをほゝ笑むやうにキラキラと光つた。

半六君はやあしばらくぶりともなんともいはず默つてそれを帶の端へ卷き込んだ そしてそれを一つかたく結んだ。これで折角拾らはれた五十錢銀貨はもう落される心配がなくなつて安心した。半六君はやがて今日は何かすばらしい幸福が訪れて來るやうな氣になつて、も一度元氣よく遊動圓木の上へ飛びのつた。うんと氣張つて二三度振つた上腰を浮かして渡つて行つた、と中途で何思つたかふらくそこへ落た。落ちた足許を御丁寧にも一わたり見廻した。だがしかし呑氣な半六君もやがて氣がつくべきところへ氣がついたやうにチッと一つも一度世界共通の聲を吐きだしたと同時にニコリと譯の分らぬ笑を浮べてあたりをそろつと見廻した。幸ひなことには半六君のニコリと笑つたことに共鳴するやうなをせつかいな人間は未だねむつてゐるものかすべり臺の上から鳩が一羽平氣な顔をこちらへ向けてゐただけであつた。（大正十三、十、記）

新年廣告を集る

本誌新年號へ柳友交誼の年賀廣告を募集いたします。川柳社並に川柳家のため特に左記の特價で本誌の一部を割愛いたします。

▼一頁　八圓
▼半頁　五圓
▼名刺廣告　一圓
（名刺廣告は住所氏名雅號範圍若し句を載せる場合は一句限）

申込期限　十二月五日迄

廣告原稿は成る可く早く御送付を願います。

本社廣告係宛

川柳塔

關本雅幽

○

ついそこへ息子出て行く春の宵
從ふて行かねば犬の首しまり
背の子が夕日を浴びて落そうな
姉さんに負けずに生んでみじめなり
ステッキと子と取替へる癖になり
國の母井攻めに逢ふ間借り
全盛は杉植ゑ付けた頃の事

駒井美の作

○

算盤を持つ住職の丸く肥ゐ
丸髷に三日結せる塔の澤
追分をほめると下男恐入り
寺男捨子だと云ふ子を育て

也有の川柳味

蛭子省二

喘鳴錄

本誌第一卷第九號に拙吟長か絲瓜喘息持の餌食なりを載せたが、十餘年前此の疾を得てより毎秋冬非常なる苦惱を繰返し廢物同樣、今年も九月來殆んど晴々した日を送らず自ら注射なぞ行つて消光して居る、某日柳友佐々木桂雨氏から、鶉衣二卷を惠まれた。夫は吾等が名古屋產である關係上藩の重臣である横井也有の著であるから、申す迄もなく鶉衣は俳文中古今獨歩のものである。此の書の中に絲瓜辭と云ふのがあつて、一句添ゐてある。

垣に絲瓜さてはあろじも疝氣持

絲瓜が喘息以外、疝氣にも妙藥である事を敎ゐらるゝと俱に、拙吟は餘りに自己本位に墮して居た事を、恥しく思つた。

チト岐路に入るが、自分は喘息が苦しむ所から、古來の治療法民間藥等を調査

掃寄せの分で米屋は四五羽飼ひ
ひさびさで逢へば子役の聲變り
鍍金だと知らず番臺大事がり
もうけ口聞く丈養子聞いて來る

佐々木默闇

○

通振つた癖がなければいゝ男
もてぬ筈天下國家の事許り
ぼんぼんは何時覺ねたか籠の鳥

岩崎柳路

○

端錢だけチップに置いて出る氣也
女文字らしいのもある告知板
國訛同志で話す面白さ
未亡人へスパイを賴む事が出來

松本助六

○

旗日迄丁稚カレンダ繰つて見る
交替の車掌々々ミたわむれて
水垢で格子を染めた舊家なり
鷄が暮れる籔から戻つて來

して、ノートに書いて置いたのが臺灣で紛失せしが、富士川博士の著書に可成り記載されてある。滑稽文學方面では寡聞にして今僅かに一つを記憶する。

或人喘息の病起りて痰にせきつめられ横にも得臥さで微暗き一間の内に倚りかゝり居る。醫師に見するに產後の疾かと思ひにたり、脈取りて立退きつゝ產の上には斯樣の事もあり苦しからずと云ふ、之れは女にはあらずと斷りければ、醫師麁忽を云ひけりと思ひて詠める。

女かと見れば男のやまゐは
痰やせくらん喉のなりひら
（曾呂利狂歌咄卷の五）

さて也有は非常に多藝の士で、寶曆四年五十三才にて、今は電車の音が喧しい前津の里半掃庵に隱栖せられ專ら文事を樂しまれた。句集に蘿葉集、雜話集に管見草ある由なれ共、自分は手にし得ない事を遺憾に存ずる。

白い水撒いて豆腐屋吸ひつける
走りよつて來て叔母さんを歩かさず

○　武田彩霞

嫉妬心速風のやうに襲ふて來
鬼灯屋舞妓に一つまけて遣り
上女中酌をさせたがもめ始め
交叉點先の電車がよく止まり
煙だけ殘して消ねる松之助

○　高見柳骨

趣味に生き趣味に苦しむ日が續き
品物を見るより先に金をきゝ
氣のひける樣な言葉を交される
病床で日和を聞いてごうする氣
ストーブのそこで泣いたを知つてるか

○　黒木莢豆

これも果敢なし二樂莊の夢
開墾地三菱の音三井の音
響き響く琵琶の音の響き

名古屋には朱樹會なる組織があつて、也有曉臺士朗の三大家追善の美舉が行はれ、大正十二年六月三日に催された出品目錄の一部に依るこ

草刈のをこなになりて田刈哉　（柳田刈畵賛）
虫の音の掃れて遠し寺の庭　（落葉掃畵賛）
雪ならで墨にて竹の面白し　（竹畵賛）
己が名の栗にはつかで棚さがし　（葡萄棚栗鼠畵賛）
まだ遠き秋にゆびさす暑さ哉　（布袋畵賛）
狩人にこそ角はあれ鹿の聲　（樹下狩人畵賛）

なごがあろ、そして也有は俱に追善されて居る曉臺派は反對して立つた人で、寧ろ支考派に屬して居た。尙ほ鶉衣から八句を拔いてみる。

我菊や尺ごりむしの手もからず
汲かへてもこの月あり手水鉢
月に雪に花に德利の四方面

戀人來らず　情婦來る

膝に在る指にも智慧のひらめきぬ

ニンマリと己れの愚かふりかへり

惚合つたやうに年寄り湯に浸り

さてあやしいと思ふ手品にすきもなし

ちらと輝きて涙晴れ渡る

ほつねんとして停留所が殘り

高橋かほる

○

枝振りの好い松のある郡役所

指サックはめて板塀のねうち下げ

部屋入りに首筋細い女優なり

吉田屋も富田屋も知らず消費者

すき燒にねぎをはさむも女なり

ホラ貝を吹いて古市素見され

麻生葭乃女

○

兒を寢かしてからの天下を寢てしまひ

あの人に少し氣のある姉娘

郊外電車の灯にもほのめく夜の街

花あらば花の留守せん下戸ひとり

四角なる浮世の蚊屋はしまひけり

剃てこそ月にまことの影法師

友とせむ臍物いはゞ秋の暮

編み笠の俄隱者や年の市

之等の句を檢すると雜俳趣味が多量に含まれ　我が川柳と相通ずる一脈がある。

◇也有四十九才(寬延三年)武玉川初篇出版(川柳三十三才)

◇也有五十三才隱栖(寶曆四年)武玉川六七篇肩斧目錄五篇、童の的出版(川柳三十七才)

◇也有六十四才(明和二年)柳多留初篇出版(川柳四十六才)

◇也有八十二才歿(天明三年)柳多留十八篇出版(川柳六十六才)

斯く川柳界の最も盛んなりし時代に、平俗を主張された一派の俳諧道に自適せし也有の句は、川柳家が眞面目に研究して他山の石とせねばならぬ。

也有研究には名古屋の醫科大學教授石田元秀先生が第一者であらせらるゝと聞く、機をみて教へを乞はむ事を希ふ。尙

夫職は下駄のよごれにも目立ち
七光りだと婦人記者思へども
泰然と犬は女關口に座し
海鳴りを物凄く聞く父の留守

西垣松雨

○

豐作に俵の繩のしめ心地
髪結が來て旦さんの來る日なり
デパートでつかい靴をニューと出し
光秀が出て義太夫の聲がゆれ
待つて〳〵居るのへ飯をすませて來
張板がも一つ欲しい好い日和
やりくりを妻はそれとも知らぬなり
御隱居も赤いてがらを譽めて去に
秋田から出た其まゝの板園ひ

原史風

○

いざ火事となれば官吏は逃げるだけ
女房の有るのに仲居はやし立て
親の血を享けたと見へぬ金使ひ

ほ也有の小研究としては藤井博士の犀利なる文がある。自分は參考とした次第にて、博士は也有の句の、切字を置き換へ或は除去したら殆ど川柳式となると例を示されてある。

小便はよその田へして早苗とり
（小便はよその田へする早苗とり）

くさめして見失ふたる雲雀哉
（くさめして雲雀の行へ見失ひ）

物まうの聲に物着る暑さ哉
（物もうの聲に物着る暑い事）

也有に教へられる、大なる事が殘つて居る。『よのころ』誌の三の八に久良岐翁が雜誌『三曲』を讀まれ、地唄茶の湯音頭か也有の作なりと記されたるを見て、蜀山人の清元北洲に對比すべき材料を得て喜ばしく思ふと、申して居られるが、實に也有の鶉衣は蜀山人に依り木版にせられたので、前篇四方山人の序、後篇六林の序に明かである。蜀山人は狂歌狂文の名手なるが

戀人に逢ふて星臺を横へそれ
敷島を有り丈け吹ふて眠られず
氣がついた蜻蛉に竿が長過ぎる
嫁入つてから江戸兒になりすまし
思ひ切り投げた掃除の藥瓶
高下駄が手間取つて居る煙草の火
不自然をのろはば別な群にされ

○　橋本二柳子

森さした店の主婦は門に立ち
鷄もしきりに餌を探してる
電柱の陰に待つのは女なり
醉つたのが歩るかうさ云ふ風が吹き
琴彈いて面白さうに遊んでる
頂戴さ云へば何んでもくれるなり
死んだのさおんなじ女の顔を見る
先生に代筆賴む宿の畫
落ちてくれなさ母親下にゐる

いにしへ安永の始め角田川の畔長樂精舍に遊びて也有翁の借物の辨を見侍りしが餘り面白けれは寫しかへの侍りきさある程、流石に狂文の英雄蜀山人にして、俳文の豪傑也有を知つたわけである自分は病中日夜枕頭に置き親しみて飽く事を知らぬ。

狂文さ云ひ　俳文さ云ふものがあるからには、柳文もあつて然るべきださ思ふが、不幸にして昔の川柳家に也有蜀山人に對比すべきものを見出ださぬ。今柳多留の序文の如きを繙いても、名文章は至つて少い。古になしさせば大正の柳壇に於て此方面の努力を忘れる事は出來ないわけである。

▲お取次

漫畫
漫文　川柳ふさこころ手

定價金壹圓廿錢送料八錢

御註文は本社宛の事

振替大阪三一五一四

編輯後記

◆主幹が病氣でずつと休んでゐられるので今月は同人のだれかれが寄つて編輯の手傳ひをして呉に角にも發行日に間に合すことにした。從つて種々不行屆きな點がありはしないかと恐れてゐます。病中を無理に原稿を書いて戴いたり選をお願ひしたりいろ〳〵とわがらはして誠に御氣の毒でありました。

◆本號發表の募集吟矢野きん坊氏選の『日和』は未着　相元紋太氏選の『坂』は締切後着に就き次號で發表の豫定　發表の非常に遲れてゐた、近藤飴ン坊氏選の『年增』及び次號に於て發表すべき安川久流美氏選の『山』を本號で發表することにいたしましたから不悪思召し下さい

◆本號には西原柳雨氏の『川柳略語解』石井省二氏の『喘鳴錄』を發表することを得たのを愉快に思ひます。

◆同人原史風君から『昨夜十時札幌に着きました。思つた程寒くありません。東京では岩崎柳路君に逢ひました。歸途函館で同人龜井花童子氏に面會します。花童子氏は私の得意先の會社の重役をしてゐられますので非常に奇緣だと思ひます』云々といふ便りが主幹宛に來てゐます

◆本月三日に第六支部の句會を催し、佐々木默闇氏の斡旋で非常に盛會でした。句報は次號に讓ります。

◆橋本二柳子氏は川柳雜誌の宣傳ビラ五萬枚寄贈の上近々大阪市内に散布されるさうです。

◆井上凡平氏からまた！〳〵句箋二萬五千枚寄贈されました。御好意を謝します。

◆第一支部會員の酒井駒人氏は千葉縣四街道小池商店に轉居されました。

◆第十三支部會員の熊本廣賀氏は新妻を迎へられました。お歡び申上げま〻。

◆近藤飴ン坊氏の毎夕川柳會と花屋敷川柳會とが合同して毎夕寸句社を組織されました。發展を祈ります。

◆川柳新星會は柳樽寺川柳會の後援で川柳新星會秋期大會を十一月廿三日に開催されるさうです。宿題『弟』會場東京日本橋區浪花町河岸（浪花會館）

◆同人の高橋かほる君と一緒に伊勢參りをされた、本田溪花坊氏は單獨で松江から宮島方面へ旅行されました。

◆第三支部會員德田双柳氏は數年振の希望がかなつて箕面見物をしたさうです。數年前から幾度も箕面見物に出かけては寶塚のあるものにひきつけられて今日まで行けなかつたのださうです。

◆前號で大いに活躍するやうに發表されてゐた竹田蘆穗氏はまた！〳〵病氣再發の爲め當分靜養されるさうです。（莢豆）

讀書子に告ぐ

▼大阪一流の古本屋です。どんな本でもあります。

▼商賣にかけては掛引がありませんから安心です。

▼主人公藤堂氏は本の蟲の心持をよく知った人です。

▼だからいろんな話をしながら愉快に本が見られます。

▼本をむさぼつて讀むころになりました。

▼道頓堀邊へ御出かけのせつは是非立寄ってあげて下さい。（路耶生）

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南五六二番

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書『川柳雜誌原稿』と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

一周年記念號（二卷一號）課題

十一月二十五日締切

▼金庫（廿句以内）吉川啞人選
▼松（同）竹田蘆穂選
▼店先（同）高橋古城山選
▼弟（同）柳川洲馬選
▼旅人（同）龜井花童子選
▼牡蠣船（同）塚崎松郎 神崎一閑子 共選

第二卷第二號課題

十二月二十五日締切（各題二十句以内）

▼試合　井上劍花坊選
▼除隊　龜井花童子選
▼竿竹　橋本柳子 森田輝翠 共選

毎號募集

▼近作柳樽（句數無制限）麻生路郎選
▼各地柳壇（會報）編輯局選
▼文章（評論研究吟行漫文）

定價

一部　參拾錢（郵税）
六部　壹圓六拾錢
十二部　參圓（共）

廣告料

特等　一頁　五圓
普通　一頁　參拾圓
同　半頁　壹貳拾圓
五號一行　壹圓

▼御送金は振替口座大阪三一五一四番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない事

大正十三年十一月十日印刷
大正十三年十一月十五日發行

第一卷第十號（毎月一回十五日發行）

編輯兼發行印刷人　兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地　麻生幸二郎

印刷所　大阪市東區農人町二丁目七番地　藤本兄弟社

發行所　兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地　川柳雜誌社

振替口座大阪三一五一四番

賣捌書店

（大阪）明文堂　百足屋　公立社
（東京）東條（京都）三宅（神戸）米田
（金澤）石井（松任）三須（國館）石塚

川柳雜誌社同人（いろは順）

主幹　麻生路郎

岩崎柳路　原史風
橋本二柳子　西垣松雨
龜井花童子　吉川啞人
太田一聲　太田徹底郎
高橋かほる　高橋古城山
高見柳骨　竹田蘆穂
武田彩霞　竹内多聞
宗清夜調　黑木莢豆
柳川洲馬　松本助六
駒井美の作　麻生葭乃
佐々木默閣　宮内一洲
森田輝翠　關本雅幽

支部所在地

第一支部　大阪市西區八條通南小路　幹事　橋本二柳子

第二支部　大阪市外天下茶屋南下ノ森三五〇　幹事　森田輝翠

第三支部　兵庫縣武庫郡西灘村河原東五九〇　幹事　太田一聲

第四支部　大阪市西區鶴町四丁目十三號地嵐山方　幹事　關本雅幽

第五支部　大阪市東區餌差町二二一番地　幹事　駒井美の作

第六支部　兵庫縣武庫郡六甲苦樂園　幹事　佐々木默閣

第七支部　大阪市外南濱一八二　幹事　西垣松雨

第八支部　神戸市旭通二丁目八三　幹事　宮内一洲

第九支部　山口縣山口町石原小路　幹事　柳川洲馬

第十支部　神戸市中山手通二丁目九五　幹事　武田彩霞

第十一支部　東京芝區愛宕町一ノ一六大成社内　幹事　岩崎柳路

第十二支部　國館市青柳町五〇　幹事　龜井花童子

第十三支部　大阪市外平野鄉梅ヶ枝町五丁目　幹事　松本助六

本社幹事　蘆穂、葭乃（編輯）啞人、古城山（宣傳）二柳子（會計）一聲（廣告）莢豆（寫眞）

特別原稿募集！

川柳雜誌 一周年記念號（第二卷第一號）

▼懸賞募集課題

（本誌三二頁を參照されたし）

句稿締切十一月廿五日限。各題の天位に川柳雜誌一箇年分地位に半箇年分、人位に三箇月分を贈呈いたします。但し同一人で入賞した場合には高點の一方のみに賞品を送ります。

▼川柳家失敗談

編輯局選

川柳家失敗談は自分のでも、他人のでもよろしい。文章の長短は制限しませぬがなるべく短かくて面白く讀める範圍のもの。掲載した分に對しては全部薄謝を呈します。

記念號は增頁して出來るだけうれしい雜誌にしたいと思つてゐます。どんなものになるかはいよ〳〵蓋をあけるまでお預りさいたしておきます。

川柳雜誌社編輯局

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）
大正十三年十一月十日印刷 大正十三年十一月十五日發行

定價三拾錢